

「貨幣の信用理論」の再構築に向けたエコロジー貨幣論からの示唆

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪公立大学経済研究会 公開日: 2023-03-16 キーワード (Ja): 貨幣の信用理論, フレデリック・ゾディ, エコロジー貨幣論, 貨幣の本質 キーワード (En): MMT 作成者: 瀬尾, 崇 メールアドレス: 所属: 金沢大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20230225-003

「貨幣の信用理論」の再構築に向けた エコロジー貨幣論からの示唆

瀬 尾 崇

- | | |
|-----------------------------|-------------------------|
| I はじめに | IV 異端派経済学の貨幣理論の総合に向けた示唆 |
| II 貨幣の信用理論（信用貨幣論） | V まとめ |
| III エコロジー経済学における貨幣・信用に関する議論 | |

摘 要

本稿では、現代の異端派経済学の貨幣・信用理論を構成する上で重要な要素と考えられる「貨幣の信用理論」の再構築に向けて、経済学史的な確認と、再構築に向けた手がかりの一つとしてエコロジー経済学における貨幣・信用をめぐる議論からの示唆を導出する。まず、「貨幣の信用理論」をめぐる議論の潮流において、シュンペーターにとつての先行者あるいは同時代の論者であるマクラウド、イネス、ソディに再構築に向けた手がかりを求めた。その上で、最近のエコロジー経済学における貨幣・信用をめぐる議論をフォローしながら、それを現代の異端派経済学の貨幣・信用理論と対置させることによって、「貨幣の信用理論」の再構築へ向けた示唆を導出する。

I はじめに

本稿の目的は、現代の異端派経済学の貨幣・信用理論を構成する上で重要な要素であると考えられる「貨幣の信用理論」（あるいは信用貨幣論）の再構築に向けて、経済学史的な確認と、再構築の手がかりの一つとしてエコロジー経済学の貨幣・信用をめぐる議論から示唆を導出することである。

本稿の問題意識は理論的・学史的なものであり、シュンペーター体系のミッシング・リンクの一つである貨幣・信用理論を理論的に再構築する研究課題から生まれたものである。周知のように、シュンペーターの経済理論体系は、いわゆる静態と動態の二分法にしたがって構築されているが、言うまでもなくその核心は動態論にある。それは、企業者による新結合

[キーワード] 貨幣の信用理論, フレデリック・ソディ, エコロジー貨幣論, 貨幣の本質, MMT

の実践を通じて現れる資本主義経済の発展過程（経済進化）を対象とした理論である。シュンペーターにとって経済進化を形成する3つの要素は、新結合、企業者、そして銀行家であるが、このうち資本主義的であることを特徴付けるのは銀行家である。この銀行家に関連する貨幣・信用理論は、シュンペーター体系において相対的に完成度の低い分野である。これまでの遺稿研究も含めた文献研究で明らかになったことの一つは、「貨幣の信用理論¹⁾」の展開が欠落していることであり、その再構築がシュンペーター体系にとって不可欠だということである。

したがって、本稿ではまず、「貨幣の信用理論」の再構築を考える上で、この路線におけるシュンペーターにとって先行するあるいは同時代の3人の論者、ヘンリー・D・マクラウド（1821-1902年）、アルフレッド・M・イネス（1864-1950年）、そしてフレデリック・ソディ（1877-1956年）に再構築の手がかりを求めることにした。彼らの議論は、それぞれ独立したものであるものの、密接に関連し合う部分がかなり大きく、さらに現代のエコロジー経済学における貨幣・信用理論の先人としてもしばしば位置づけられている。そこで本稿では、最近のエコロジー経済学における貨幣・信用をめぐる議論をフォローしながら、それを現代の異端派経済学の貨幣・信用理論との対置させることによって、「貨幣の信用理論」の再構築へ向けた示唆を導出する。

以下の論文の構成は次の通りである。第Ⅱ節では、経済学における「貨幣の信用理論」をめぐる議論について、シュンペーター、マクラウド、イネスに依拠しながら、これまでに明らかにされたことを確認する。第Ⅲ節では、エコロジー経済学における貨幣・信用をめぐる議論に関して、その源泉に位置付けられるソディの貨幣観から、それを踏まえた最近のエコロジー貨幣論構築の試みまでを概観する。第Ⅳ節では、最近の異端派経済学における新しい貨幣・信用理論の展開と突き合わせながら、エコロジー経済学から得られた示唆も踏まえて、われわれの「貨幣の信用理論」の再構築に対する含意を考察する。最後に全体を総括する。

Ⅱ 貨幣の信用理論（信用貨幣論）

1 シュンペーターの貨幣・信用理論

周知のとおり、シュンペーターの経済学体系の構造は、静態と動態の二分法とその統合によって特徴づけられる。これに加えて、もう一つの二分法として注目すべきは、実物的分析と貨幣的分析のそれである。この後者の二分法について論じられている Schumpeter (1954) によると、一方の実物的分析は、「経済生活のあらゆる本質的現象が、財貨および用役、これらについての意思決定、ならびにこれら相互間の関係といったものをつうじて叙述できるという原理から出発するもの」（邦訳（下）：501）とされる。この実物的分析における貨幣とは、交換を容易にするための技術的装置にすぎず、それゆえ経済過程に影響を及ぼすものではない。そこでは物々交換経済が想定されており、貨幣は中立的なヴェールにすぎない。

他方で、貨幣的分析は、次の4つの特徴をもつとされる(同上:502-7)。

1. 貨幣という要因が、通貨の混乱とでも呼ばれうる例外の場合を除けば、現実の経済過程の説明において二次的な重要性しか持たないという命題を否定しようとする。
2. 貨幣という要因をわれわれの分析的構造のいわば基盤に導入し、経済生活のあらゆる本質的特性が物々交換経済のモデルで代表されうるとする考え方を放棄させるものである。
3. さらに集計的分析または時としてマクロ的分析と呼ばれるものを意味している。換言すれば、それは経済体系の変数を、たとえば総所得、総消費、総投資等々のような少数の社会的集計量に還元しようと試みる分析にほかならない。
4. 論理的必然によってではないが、しかしそれにもかかわらず密接に、費消ならびに貯蓄、さらにこれらと関連して金融政策および財政政策についての一連の特徴的な見解と結びつけられている。

したがって、貨幣的分析とは、中立的なヴェール自体を分析することであり、さらに貨幣を通じて実物経済との相互関係も分析するというように、貨幣を軸とした実物経済と貨幣経済の統合的分析のことを指していると考えられる。この貨幣的分析への注目は、ケインズの「生産の貨幣理論」と目的を共有するものと考えられる。いずれにせよ、シュンペーターは、両者を明確に区別した上で、従来の経済学では実物的分析が中心的位置を占有してきたこと、そのような実物的分析の勝利の背後には、貨幣的分析の「薄弱さ」(同上:519)があったことを指摘している。

それでは、シュンペーター自身は貨幣的分析をいかに展開したのか。貨幣問題は、シュンペーターにとって景気循環と並ぶ生涯の二大研究テーマだったにもかかわらず、最終的に未完成に終わったことが知られている(McCraw, 2007, 邦訳:595)。シュンペーターの貨幣・信用理論に関する遺稿研究からわかっていることは、シュンペーターは、貨幣的分析においても静態と動態の二分法を貨幣的分析にも適用しており²⁾、それぞれ「信用の貨幣理論」と「貨幣の信用理論」と呼んでいることである。

一方の、静態における「信用の貨幣理論」とは、信用を貨幣に含めて捉えた上で、当時、シュンペーターが唯一の利用可能な貨幣理論とみなした貨幣数量説に対して独自の修正を加えて適用したものである。分析対象である静態とは、ワルラスの一般均衡体系を、財・サービスの交換行為の相互依存関係が毎年不変の規則で再生産される循環的フロー³⁾と見て純粋経済学的に捉えた経済過程のことである。循環的フローにおける貨幣の本質的役割は支払手段(交換媒体)機能であり、それは流通経済における財貨数量を対象とする技術的機能である。何を貨幣と捉えるのかについて、シュンペーターは、(1)流過程にあるかどうか、(2)社会的生産物と対応関係をもつかどうかという2つの基準によって判断されるとした上で、債権債務関

係を相殺する貨幣代替物として機能する正常な信用を貨幣に含めている。これが「信用の貨幣理論」たる所以である。シュンペーターは、循環的フローの貨幣的分析に対して貨幣数量説を適用するために、いわゆるフィッシャーの交換方程式 $MV=PT$ (M : 流通貨幣量, V : 貨幣の流通速度, P : 一般物価水準, T : 財・サービス取引量) を、所得総計 E と社会的生産物（一定期間に消費される消費財の価格 p_i とその数量 m_i の積和）との対応関係として捉え直す修正を施した。すなわち、 $E=M \times U=p_1 m_1+p_2 m_2+\cdots+p_n m_n$ (E : 所得総計, U : 流通速度) である。このような社会的会計アプローチの視点は、生産されたものが分配を通じて支出されるという社会的循環を明確化し、所得単位の購買力を分析する手がかりとしたという点に独自性がある⁴⁾。

他方の動態における「貨幣の信用理論」に関しては、シュンペーターはその重要性を指摘するにとどまり、具体的な展開を前に彼の筆は途絶えてしまった。ただ、いくつかの断片的な言及箇所として注目すべきは、Schumpeter (1917-18) の最終章にある次のような示唆である。

貨幣的過程、すなわち単に「指図証券」にしかすぎず「証明書」ではない貨幣の創造と、この結果である価格の上昇とは経済発展の強力なテコとなる。このような貨幣の創造うちに近代的信用の本質が存在する。これが経済的進歩を達成するためのすぐれて資本主義的方法である。貨幣の創造のうちに貨幣の単なる流通経済的機能と異なる、貨幣の資本主義的機能があらわれている。(Schumpeter, 1917-18, 邦訳: 110; 下線は筆者)

この引用から、「貨幣の単なる流通経済的機能」を超えたところに、動態（発展過程）における貨幣の創造を中心とした「貨幣の資本主義的機能」が展開される予定だったことがわかる。また、これら2つの機能の違いについて、後に次のようにも述べている。

論理的に言えば、現実社会の信用取引に到達するために、鑄貨から出発するのが…、果たしてもっとも有効な方法であるかどうかは決して明瞭ではない。それよりもまず最初にこれらの信用取引から出発して、資本主義金融をもって、債権債務を相殺してその差額を繰り越していく手形決済制度と見る—したがって「貨幣」による支払いの一つの特殊な場合にすぎず、何ら特別の基本的重要性を持つものではないと見る—ほうが、いっそう有効な方法であるかもしれない。換言すれば、実際的にも理論的にも、貨幣の信用理論のほうが、おそらくは信用の貨幣理論よりも、もっと好ましいものでありそうなのである。(Schumpeter, 1954, 邦訳(中): 623; 下線は筆者)

ここでは明確に、「信用の貨幣理論」に対する「貨幣の信用理論」の優位性が表明されている⁵⁾。あらためて両者の違いをまとめておくと、「信用の貨幣理論」では、文字通り信用は貨幣に含まれる。それは債権債務関係を相殺する貨幣代替物としての「通常の信用」であ

り、「銀行の媒介機能」として現れる。これに対して「貨幣の信用理論」では、社会的生産物に対する請求権としての信用が全面的に導入される。それは循環的フローから逸脱して経済に内生的変化を引き起こすような「異例の信用」であり、その具体的形態は「銀行の信用創造機能」である。このように、信用へのアクセスを可能にする信用創造こそが「貨幣の資本主義的機能」であり、それゆえシュンペーターは信用の分析を資本主義の本丸としたのである⁶⁾。

シュンペーターにとって、信用創造は、「明々白白たる事実を人為的な構想によって覆い隠さないで、これを率直に認知するばかりでなく、また十二分に発達した資本主義社会の特徴たる貯蓄と投資の特有なメカニズムと資本主義的進化における銀行の真の役割とを、明らかにするもの」(Schumpeter, 1954, 邦訳(下): 669-70)であった。すなわち、企業者による新結合の実践を資本主義的なものにするのは、銀行家による信用創造であり、それは企業者が自己の意思に従って、現在利用中の生産要素の用途変更実現するためにいつでも利用可能な支払手段として、その企業者のためだけに創造される貨幣資本である。

このような貨幣の資本主義的機能(貨幣資本)である信用創造に関して、シュンペーターは遺稿『資本と銀行の理論』の第14章と付録でやや立ち入って考察している。そこでは信用創造の特徴が、次の3点にまとめられている。第一は、創造された信用は既存の財・サービスとの対応関係をもたないので、循環的フローにおける社会的清算システムに不均衡が生じるということである。均衡の近傍から逸脱して発展過程を開始する新しい生産の実現には、システムへの追加的な支払手段の導入が不可欠とされる。第二は、企業者の追加的な資金需要に対応した信用の拡大は、預金残高の創造という形態をとるということである。すなわち、追加的な支払手段は、銀行の信用供与、したがって同じ機能を果たす新たに創造された請求権としての貨幣によって利用可能になるのである。そして第三は、新たな信用が創造された時点では、財・サービスの数量に変化がないため、経済内部の支払手段が過剰になることから信用インフレーションが発生することである。シュンペーターは、請求権としての貨幣の利用可能性は、経済活動に対するそれ以前の個人的・物質的貢献を保証するものではなく、代わりにあらゆる財・サービスをもたらす前に国民的配当への参加を可能にするものであるとしている。これらの特徴を具体的に説明するために、付録では、銀行組織の貸借対照表を用いた数値例を示しながら信用貨幣の動きを追跡している。このような会計的アプローチは、現代貨幣理論にも通ずる分析方法の先駆けと見ることができるだろう。

シュンペーターの信用創造理論は、金本位制の下での銀行業務を前提にするという時代的制約や、金融仲介機能という商業銀行の実務レベルにとどまったことから、理論的限界があることは否めない⁷⁾。ただ、彼の「貨幣の信用理論」は未完であるがゆえに、現代の異端派経済学の貨幣・信用理論の諸成果を取り込みながら、現代的な再構築の可能性をもつ研究対象であるといえるだろう。

2 マクラウドの「貨幣の信用理論」

シュンペーターが信用創造論を展開するにあたって、その先駆者の一人として挙げたのが、スコットランド出身のヘンリー・D・マクラウドである⁸⁾。マクラウドは、在野の経済学者だったが、現在では信用創造論を初めて体系的に論じた経済学者として知られている⁹⁾。マクラウドは、弁護士として銀行の訴訟問題に関わったり、為替手形や銀行券に関する法規作成にたずさわったりした経験から、法的側面から信用理論にアプローチしたところに特徴がある。彼の信用に対する法的アプローチの具体例として、ここでは権利（所有権）、通用性、貸与、負債の決済という4つ問題を取り上げる。

まず、権利（所有権）に関して、マクラウドは、有形物・人的能力・抽象的権利の3種類の経済量を交易の対象として挙げている。前2者は言うまでもないことだが、抽象的権利は、それが取引対象として一般化するためには所有形態が多様化することが前提であり、その意義と機能が解明されるためには、所有権に対する法的考察が不可欠であるとされる。続いてマクラウドは、所有権について、有形所有権・無形所有権・無体所有権の3つに区分する。有形所有権とは、権利と物体が一体化した有体物（動産・不動産）を支配する権利であり、無形所有権とは、抽象的権利のうち無形物（知的創造物など）を支配する権利である。これら2つは広義の物権に含められる。それに対して無体所有権とは、ある人が他人に対して一定の行動を請求する権利のことである。それは物権ではなく人に対する権利であって、特定の物体とは切り離されて独立して売却できる。このような区分に基づく、信用＝債権債務とは、特定の金額の貨幣に対する権利ではなく、債務者が債権者に必ず貨幣を支払うという約束であり、債権者が債務者に対して支払いなどの一定の行動を請求するという「人（の行為）に対する権利」にすぎない。マクラウドは、信用取引が論理的にも歴史的にも本源的なものと位置づけており、取引が不等価である場合には信用を介して行われるのが通常であって、貨幣はそのような取引に付随する負債、すなわち差額に対する請求権を表示し、指図し、支払いを約束し、保証する手段の一つとして生成されたにすぎないと論じた。

次に、無体所有権の通用性に関して、マクラウドは通貨の2つの系譜を示している。一方の金属貨幣は、ある特定の商品が一般に受容されると通用性を獲得するのに対し、他方の銀行券や為替手形のような債権は、無体所有権が譲渡性を獲得することを前提に通用性を獲得するとした。債権の譲渡性の拡大にとって問題となるのは、債務者の信用の確実性とその保証であるが、銀行が登場して貨幣と同じ移転の機能を自らの負債に付与するという特別な便宜を顧客に与えることによって、債務者としての役割を引き受けたのである。

続いて、貸与に関して、マクラウドは2つの形態を区別する。一つは、所有権は貸し手に残ったままで、使用权だけが借り手に与えられる貸与形態であり、もう一つは、所有権が借り手に与えられ、貸与物に等価物を要求する権利を貸し手が得る貸与形態である。これ踏まえると、貨幣の貸付や請求権の保有は後者に含まれる。

最後に、債務の決済に関しては、その方法として免除・弁済・更改・相殺などがあるが、

現代では貨幣ではなく信用（負債）の相殺によって債務が解消される。その際、負債がいかなる形態であるかは本質的なことではなく、銀行の帳簿上の負債である預金（貸方）も貨幣と同じ決済性をもつ。

以上のような法的アプローチを踏まえて、マクラウドの信用創造論をまとめておこう。銀行の本質的機能である信用創造は、無体所有権の貸与という形態をとることから、無からの信用創造を可能にする。すなわち貨幣と交換に信用を販売するのではなく、その信用を超える信用の発行によって、すなわち負債の売買によってはじめて信用は創造されるのである。また、信用は将来において一定額の貨幣の支払いを請求する権利であり、将来収益に対する現在の権利でもある。マクラウドの法的アプローチに基づく信用創造理論には、シュンペーターにおいては、企業者の既存生産要素に対する請求権が、銀行家によって無から創造するところに同じ論理がみえてとれる。

3 イネスの「貨幣の信用理論」

アルフレッド・M・イネスは、古川(2020)において「オーソドックスな見解を否定し、『信用』こそが貨幣に先立つ歴史的発展の起源であると最初に強調したイギリス人」(116)として紹介されている。イネスは、1913年の「貨幣とは何か」および1914年の「貨幣の信用理論」というたった2つの論文で、貨幣と信用についてその起源から論じた。ここでは、イネスの「貨幣の信用理論」に絞って考察する¹⁰⁾。イネスとシュンペーターは直接にも間接にも接点はなく、互いに言及し合うこともなかったようだが、両者はマクラウドを介して「貨幣の信用理論」の構築という問題意識を共有しているように思われる。

イネスは、商品貨幣論や金属貨幣論に対置される考え方として「貨幣の信用理論」を位置づけた。そしてInnes(1914)の前半では、歴史的証拠を挙げながら、信用とは「政府コインはただひとつドルだけであり、すべて他の貨幣形態はそのドルで支払われる約束である」(邦訳：80)と述べ、一般的な認識からの転換の必要性を説いた。その転換とは、「ドルというものは決して目には見えないし、手で触ることもできないのである。…われわれが扱っているのは、ドルの証書であり、ドルのノートであり、ドルのコインと呼ばれているものである。…それは単にドルという言葉が書かれているだけである」(邦訳：83)という認識への転換を意味する。ここで問題となるのは、コインや銀行券は、発行者が実際に約束している義務であるため、貨幣の形態がなんであろうとその発行者が約束を果たしうるかどうかが、貨幣がしかるべき時に金属の一片ではなく債権(credit)によって償還されて貨幣の安定性が支えられるかどうかである。債権と債務(debt)は抽象的概念であって、具体的なものからなる標準によって測定することはできない。

Innes(1914)の後半では、「貨幣の信用理論」に対する理論的考察が展開されている。イネスは論文の末尾で、読者にほとんど理解されていない24の論点を列挙してくれているので(邦訳：108-9)、そこから抽出する形で、「貨幣の信用理論」に大きく関連するイネス

の主張のポイントをまとめておくことにする（下線は筆者）。

(1) 売買は商品と信用との交換である。

(2) 信用のみが貨幣である。

(3) 貨幣単位は債権 credit と債務 debt を尺度するための抽象的標準である。 それは変動を免れないが、債権債務等値の法則が守られる限り、安定している。

(4) 債権は債務を消し去る。これは商業の古来よりの基本法である。販売によって債権が入手され、購買によって債務が創造される。それゆえ購買は販売によって支払われる。

(5) 商業の動機は債権の獲得である。

(6) 銀行家は人びとの債務を集中し、相互の債務を取り消す者である。銀行は商業の手形交換所である。

(7) コインは信用手段であって、債務のトークンであり、その本質は誰によって発行されようとも、タリーその他の形態の貨幣と同じである。

(8) 貨幣の発行は、サービスや商品の大きな購買者としての政府の排他的特権ではなく、単にその機能のひとつに過ぎない。 実際、あれこれの形態の貨幣が銀行や商人等によって発行されている。

(9) 信用の価値はその背後にある金の存在にではなく、債務者の支払能力に依存している。

(10) 政府貨幣は徴税によって償却される。

(11) 一片の金に記された政府の刻印は、単なる商品から債務の印へと金の性格を変化させる。 紙券貨幣の金貨による兌換は、決して債務の償却ではなく、それは同じ性質をもつ債務のある形態から他の形態への交換にすぎない。

(12) 銀行が保有する「法貨」の過大な準備は政府通貨膨張の証拠である。

(13) 政府貨幣の膨張は国中で信用の一層大きな膨張を促し、その結果、貨幣の一般的な減価を引き起こす。

(14) 貨幣の減価は物価膨張の原因である。

イネスの「信用の貨幣理論」は、理論としての具体的展開というよりも、人びとが信用問題を正確に認識し直すための概念規定を中心に構成されていると考えられる¹¹⁾。シュンペーターが、経済の循環過程から発展過程へと積上げ式に資本主義の動態にアプローチしたのに対して、イネスは、歴史的考察に依拠しながら、正確な概念規定の下に貨幣・信用問題の現実にアプローチしようとしたというような方法論的な相違はある。ただし、イネスが最後に整理した各論点は、シュンペーターの「貨幣の信用理論」の再構築においても反映されるべき意義を有するのは確かであると考えられる。

III エコロジー経済学における貨幣・信用に関する議論

1 出発点としてのフレデリック・ソディの貨幣論

フレデリック・ソディは、1887年に英国で生まれ、オックスフォード大学で有機化学を専攻して卒業した後、カナダのマギル大学で師事したアーネスト・ラザフォード（1908年にノーベル化学賞受賞）と放射性元素の共同研究を行った。その後は英国のグラスゴー大学、アバディーン大学、オックスフォード大学で研究を重ねた結果、放射性元素の崩壊理論とアイソトープ（同位元素）理論の展開に対する貢献が認められて、1921年にノーベル化学賞を受賞した。この間、第一次世界大戦を経験し、科学文明の未来に大きな危惧を抱いて経済学へと転じ、熱力学の観点から徹底的に当時経済学を批判した。特に戦費調達をめぐって混乱した経済の貨幣的側面の状況を目の当たりにして、とりわけ貨幣論批判に傾倒した。このような略歴から、ソディは化学分野では大家だが、経済学分野では異分野からの新参者であったことから当時もそれ以降もほとんど無視されてきた¹²⁾。ところが、現在ではエコロジー経済学における貨幣論の先駆者として再評価され、また、ニコラス・ジョージ・スキャク＝レーゲンらによるエントロピー経済学に対しても先駆けとして位置づけられている¹³⁾。

ソディの経済学に対する不満の核心は、経済学における貨幣論、しかもその貨幣観に集中している。ソディの批判点のポイントは、経済学者が、「富」と「負債」を正確に理解していないことに集約される。ソディは、エコロジー的観点に立ち、彼が経済学が依拠すべきと考える熱力学の法則の観点から、富と負債の再定義と両者の関係について精緻に説明している。

まず、「富（真の富）」とは、生命維持のためのフローであって蓄積できないものであることから物理的法則に依存するものである。生命維持のためのフローとは、そのフロー遡ると太陽エネルギーに帰着する。太陽エネルギーによって生み出される富といえば農作物や動物が代表的なものであるが、それらは言うまでもなく永続的にストックしておくことはできない¹⁴⁾。この生命維持のフローの考え方を経済における生産と消費に適用するならば、概ね「生産への投資→貨幣の支出→化石燃料の使用→化石燃料の枯渇の加速化」のような経路をたどる。この生命維持のフローが従う物理法則とは、熱力学の第一法則（エネルギー保存の法則）と第二法則（エントロピー増大の法則）のことであり、手短に両者をまとめると、物質やエネルギーは量的には変化せず質的には変化することになる。ソディが強調するのは、生命維持のフローにおいて、貨幣は真の富ではないということである。それは前もって支払いを担保するための巧妙な工夫であって、それが実際に生産された対応物と交換されるなら問題は生じない。したがって、貨幣はあくまでも真の富に対する請求権でしかない。言い換えるならば、貨幣は具体的な財・サービスに対する購買力を表すものでしかないのである。貨幣を使用すればその請求権はもちろん消滅するため、熱力学の法則に従っていることになる。

次に、「負債（仮想的な富）」について、ソディはそれを共同体（国家）が支払わなければ

ならない信用貨幣（国債＝国家の負債）であると考えている。信用貨幣には様々な具体的形態があるが、例えば紙幣のような媒介形式の貨幣は、法的保証の裏付けなくしては成立しない一種の負債である。また、信用貨幣の中で特にソディが問題としたのは、利子や配当を伴って実際に存在している真の富以上に富を請求する法的権利としての貨幣である。そのような貨幣は経済学において富と誤認されている資本財としての金融資本であるとして、ソディは問題視した。利子つき資本は、物的な対応物がなくても、利子が福利計算されることによって数学的法則にしたがって無制限に増大する性質をもつのである。さらにソディは、このような負債観を、銀行にも適用する。彼は、信用貨幣を仮想的に創造するという会計上のからくりを通じて、対応物をもたない信用を無から無限に創造する装置以外のなにものでもない銀行を捉える。

ソディは、生産と消費が対応する生命維持フローとしての真の富と、貨幣資本としての負債（仮想的な富）の性質の差によって、社会の不平等が生み出される原因を見出している。資本主義のルールでは、投資のために企業や国家に前貸しされた信用は返済されなければならない。それまでの間は少なくとも現行利子率で利子を生むことが期待される。したがって、もし投資が生産を増大するのではなく単に負債を増大するだけになるとすれば、株式や債券や公債証書といった紙片の所有者たる債権者は、ほとんど増加せず停滞ないし低下さえする生産物から、一層増大する分け前を受け取ることになる。このことは、公債によって資金調達される投資の割合が大きくなればなるほど、国家の財政危機という状態に陥ることになるのである。ソディはそのような状況を避けるためには、生命維持に寄与する財・サービスの物理的フローである真の富と財・サービスと交換される部分を超える共同体の負債である仮想的な富との微妙なバランスが保たれなければならないと論じ、それを図1のような直感的な図を用いて説明している。

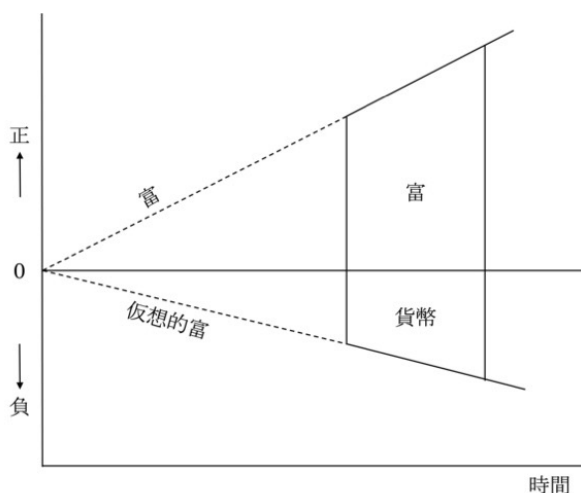


図1 「真の富」と「仮想的な富」との関係の直感的理解

出典：Soddy (1933：137) より筆者作成。

図1には、時間を通じて共同体の経済秩序が保たれるケースが表わされている。上部の正の領域において時間を通じて増大していく真の富と、下部の負の領域において時間を通じて増大していく仮想的な富との差が図のような関係にあるとき、すなわち仮想的な富に対応する真の富が存在する場合は、共同体は存続可能であろう。しかし、上述のように、真の富の増加はエコロジー的観点から有限であるのに対し、仮想的な富の増加は複利計算にしたがって無限であることから、時間の経過に伴って両者のバランスは常に秩序が崩壊される危険にさらされる可能性を孕むことになる。そのような秩序の崩壊を回避するための貨幣制度改革として、ソディは銀行に対する支払準備率を100%への引上げや、国際的な自由変動為替制度の採用といった現代の議論にも通ずる提案を行なっているが、その評価に関しては本稿の範囲を逸脱するため別稿で論じたい。

ここまで、ソディ独自の貨幣観を見てきたが、化学から経済学へ転向した研究者らしく、(1)エコロジー的な物質代謝の視点から、富、貨幣、信用といった経済学の基礎概念を独自に規定し直し、(2)生物物理的な法則にしたがう実物的側面（真の富）とそのような法則を超越する貨幣的側面（負債という仮想的な富）との関係性を問うというように、従来の経済学とは異なるアプローチをいち早く展開した。しかし、ソディの主張は時代が早すぎたのかもしれない。近年の金融危機への対応や環境問題への関心の高まりを経て、ようやく光があてられたソディの経済学批判は、いまこそ傾聴に値するのは間違いないだろう。

2 最近のエコロジー経済学における貨幣論の新展開

ソディの貨幣論は、しばらくの空白期間を経て、現代のエコロジー経済学における貨幣論の再検討と新展開において注目されることになった。エコロジー経済学は、1973年の石油危機以降あるいはそれより少し前のボールディングやジョージ・ジェスク＝レーゲンの代表的な貢献以来、その後1989年に国際学会も設立され、現代では異端派経済学の一つの潮流として確立された研究領域である¹⁵⁾。近年、特にリーマン・ショック以降の金融をめぐる世界の混乱を踏まえて、エコロジー経済学の分野でも、貨幣論をテーマとした独自の成果が増えつつあるように思われる。そのような最近の成果を見ると、そこでは明示的にも暗示的にもソディの貨幣論を踏まえたものであることがわかる。ここではジョージ・ジェスク＝レーゲンに師事した眞弓浩三の議論（Renner Daly Mayumi (2021) および Mayumi (2020)）と、エコロジー貨幣論の構築を具体的に展望している Joe Ament の議論（Ament (2020)）を取り上げて、ソディの貨幣観が現代にどのように継承されているのかを考察する。

まず、眞弓は、貨幣、利子、信用をめぐる様々な問題に対して、従来の経済学者がまだ十分な関心を寄せていない次のような3つの論点を提示しながら、貨幣・信用・利子の再検討から着手している（Mayumi, 2020: 79）

(1)物々交換から貨幣、信用へと漸進的に発展したという広く受け入れられている見解の妥当性

- (2)貨幣が熱力学の第一法則と第二法則に反していること．すなわち貨幣はゼロから生み出すことが可能でプラスの利子率で成長可能であること
- (3)貨幣が個人的富とみなせる一方で生物物理学的観点からは、同じ貨幣を共同体の負債とみなされなければならないという貨幣の二重性

(1)については、眞弓の議論を待つまでもなく、Graeber (2011) や Ingham (2004a) など、経済学の周辺領域においてすでに歴史的考察が示されている。例えば Graeber (2011) では、物々交換において欲望の二重の一致が満たされない場合、ある当事者から別の当事者に対してある量の財・サービスが残ることになり、この金額が負債を構成するとしている¹⁶⁾。普遍的に交換可能なトークンとしての貨幣の存在は、不平等な交換の結果であるため、一般に、貨幣所有者は、共同体に富を提供したものの、その見返りとして同等の富を受け取っていないと理解される。(2)に関しては、まさにソディの貨幣観の核心と同じ論点である。硬貨や紙幣などのハード・カレンシーは、エントロピー法則を回避できない。金融危機にみられたように、時間経過とともに物質崩壊が発生して物質構造が失われる。しかし、貨幣が物質崩壊してもその機能的側面は崩壊することはない。なぜなら法的・制度的に保証されているからである。このように物質的なものが本来の目的を失うのに対して、貨幣の機能は本来の目的を維持するために、両者の質的ギャップが拡大する。貨幣だけが時間経過とともに利子が発生して量的に増殖する。言い換えれば、貨幣だけがエントロピー法則に逆らうことができるのである。最後に(3)に関しても、ソディの議論とオーバーラップする論点である。個人的視点からみると、貨幣は抽象的な富の一形態と理解されるのに対し、共同体の視点からみると、貨幣は生物物理学的負債の源泉であり、共同体の将来の実質所得に対する担保権とみることができる。Renner Daly Mayumi (2020) では、個人的視点および共同体の視点からみた貨幣の位置づけが一つの経済システムにおいて共存することを「貨幣の二重性」と呼んでいる。繰り返しになるが、貨幣は、他人にサービスを提供したが、その見返りに同等のサービスをまだ受けていない人が追うべき債務を表すものである。この貨幣の特殊な機能は、そのような未確定の権利を測定し、記録し、将来の使用のために保存することである。したがって、貨幣所有者個人は債権者であるが、共同体における貨幣発行者は債務者ということになる。その結果、貨幣は共同体として長期的な生物物理学的負債を抱えることになる。生産はエントロピーの観点から赤字になる。なぜなら有用なエネルギーや材料が不可避免的に消費され、その結果、枯渇資源が少なくなってしまうからである。

以上のことから、眞弓による最近の貨幣論の再検討は、基本的にソディの貨幣観を踏まえたものであり、注目されることのなかったソディの貨幣観を再評価する研究であるといえるだろう。その上で眞弓は、ソディの貨幣観を踏まえつつマクラウドの信用理論にも言及しながら、民主的に選ばれた国民国家の代表者が発行する一般流動性の総量と分配方法を完全にコントロールすることの重要性に言及している。具体的には、個々の国民の権利を高めて貨幣発行益とコストを国民が共有し、最終的には共同責任を負うような行為にすべきと論じて

いる (Renner Daly Mayumi, 2021: 757)。一般流動性と課税を意味する貨幣の発行が、共同体の代表者たる政府の管理下に置かれなければならないならば、現代のユーロは危険な創造物とみなされることになる。グローバル化の進行によって、世界的かつ大規模な貨幣の創造が、国民国家のコントロールを超えたところで生じていることから、生物物理学的に不可逆的な負債は、決して貨幣を使って回収できない。すなわち、金銭的に環境に対する弊害を止めることはできないということに留意しておかなければならない。眞弓によるエコロジー経済学の観点からの貨幣論の再検討は、ソディによる貨幣論批判に依拠しながら、一般的な理論構築というよりも、現在の貨幣・信用をめぐる課題を明確にした上で、共同体による貨幣(負債)のコントロールに向けて、従来の改革案からヒントを得ようという点に特徴があると言えるだろう。

次に、Joe Ament によるエコロジー貨幣論の新たな構築の試みを見ておきたい。Ament の問題意識は、エコロジー経済学にはそもそも理論的枠組みが確立された政策立案に適用できる貨幣理論が存在しないという認識から、積極的にその構築を展開するところにある。Ament がその基礎に据えるのは、(1)貨幣の性質に関する社会史的理解、(2)社会的・エコロジー的に埋め込まれた貨幣の存在論の2つの要素である。

第一の要素に関して、Ament は特に社会学者ジェフリー・インガムの問題意識、すなわち、①貨幣とは何か、②貨幣はどのようにして価値を得るのか、③貨幣はいかにして社会に入り込むのかという3つの根本的な問い (Ingham, 2004a: 10) に立ち返って議論を始める。その前提として、貨幣は基本的に信用と負債の交換関係を表象する抽象的な計算単位としての機能に基づいて貨幣を規定すべきであって、Ament は「公的・私的なすべての決済可能な債権を表示するための主権的な計算単位」(Ament, 2020: 4) と貨幣を定義する¹⁷⁾。先の3つの根本的な問いに対する回答は、①貨幣は資源に対する社会的請求権である。それは価値の抽象的尺度であって価値そのものではない。②私的な主体が信用を創造することが可能であり、それが租税債務の支払いに受け入れられると国家貨幣になる。貨幣が抽象的な信用を表すものである以上、価値は本質的に存在しないので価値を貨幣の基礎にはできない。③貨幣は発行ではなく受容されることが決定的に重要である、ということになる。

これらのうち③から、Ament は新たに構築すべきエコロジー貨幣論の基礎となる第二の要素(上記の(2))の枠組みを、図2のように提示している (ibid.: 8)。これは請求権としての貨幣は、社会的なもの(社会的関係)と生物物理的なもの(資源)との2つのサーキットの間に埋め込まれた存在として2つの領域の相互依存関係を捉える結節点に位置付けるべきことを表したものである。

以上のことから、エコロジー貨幣論の積極的な指向は、やはりソディの貨幣観を踏まえながら、貨幣の社会史的考察から貨幣の認識を再構築したうえで、貨幣を社会的側面とエコロジー的側面との接合点に位置づける存在論に位置づけるところに特徴がある。ただし、Ament の指向は、まだ方法論的枠組みを提示するという出発点にあり、今後のさらなる展開

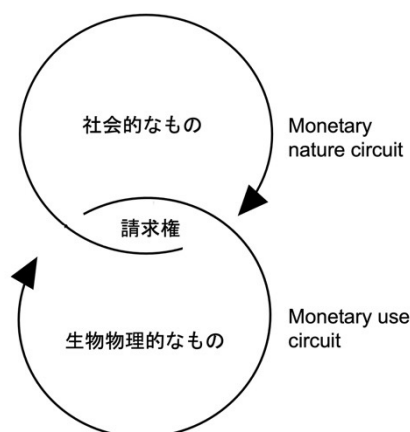


図2 エコロジー空間に埋め込まれた貨幣の存在論

出典：Ament（2020：8）より筆者作成。

を待たなければならない。

IV 異端派経済学の貨幣理論の総合に向けた示唆

われわれはここまで、「貨幣の信用理論」の素描を学史的に確認し、現代の異端派経済学の一潮流であるエコロジー経済学における貨幣論の起源と現状を考察してきた。そこで得られた知見を手短にまとめくならば、本稿で異端派経済学における貨幣・信用理論の総合に向けた支柱と位置づけた「貨幣の信用理論」は、信用こそが貨幣・信用理論の中心であって、経済学で通常定義されるところの貨幣（狭義かつ主要なものとしては、現金通貨と預金通貨）は、いまや形態が多様化した信用のごく一部にすぎないとする考え方である。その理論的支柱の一つは、無から購買力を生み出す信用創造にあり、この点において現代のいわゆる MMT やポスト・ケインズ派の内生的貨幣供給論や貨幣サーキット理論に接続することから、その具体的展開が異端派経済学の貨幣・信用理論の総合のカギを握っていると考えられる。われわれはそのような総合に対して、最近のエコロジー経済学における新たな貨幣理論の構築に関する議論に手掛かりを求めた。ただし、エコロジー貨幣論は、継続的な議論の蓄積があるわけではなく、20 世紀前半のソディによる経済学の貨幣論批判以降、いわば半世紀の断絶を経て現代において議論が再燃してきたように思われる。そこでは異端派経済学における他の貨幣・信用理論と同様に、貨幣の本質の再検討から始まり、特にエコロジー空間における貨幣や信用の位置付けに関して特徴があった。以上のようなこれまでの議論を踏まえて、本節では、エコロジー経済学から異端派経済学に対する新たな示唆や知見を得ると言うよりも、両者の発展的な相互対話を試みることにする。

まず、異端派経済理論における最近の代表的な議論の一つである MMT とエコロジー貨幣論との突き合わせから開始する。現代の異端派経済学における貨幣・信用理論といっても、

そこには、ケインズ自身の貨幣理論、イタリアやフランスを中心に展開された貨幣的サーキット理論、ポスト・ケインズ派の内生的貨幣供給論の諸派、とりわけ最近の議論の的である MMT に至るまで百花繚乱の様相を呈している。ここでは異端派における貨幣・信用理論の特徴的な内容を概ね共有していると考えられる MMT をとりあげるが、その自体が考察対象ではないため、MMT のこれまでの成果に関しては、望月（2019）で整理された「MMT で重要なコンセプト」に依拠する（62）¹⁸⁾。そこで整理された 6 つのコンセプトとは、Ⅰ．租税貨幣論、Ⅱ．機能的財政論、Ⅲ．貨幣的サーキット理論（信用貨幣論）、Ⅳ．債務ヒエラルキー（債務ピラミッド）、Ⅴ．ストック・フロー・コンシステント・モデル（SFC）、そしてⅥ．ジョブ・ギャランティ・プログラム（JGP）である。

これらに関して MMT とエコロジー貨幣論の異同を見ていくと、ⅠとⅡおよびⅥに関して両者は共有できていないと言える。エコロジー経済学では、前節のソディの議論で見たように、負債（仮想的な富）は共同体（国家）が支払わなければならない様々な形態の信用貨幣（国債＝国家の負債）のことでありと規定されるが、そのような負債が指数的に蓄積されることがとりわけ問題視され、なんらかの形で政府への支払い手段としての需要まで考察が及んでいない。したがって、租税貨幣論に相当する議論はエコロジー貨幣論では展開されていないと言える。したがって、これとも関連して、MMT のような財政支出の将来負担問題そのものを疑問視するような財政的議論から JGP のような政策提言に至るさらなる具体展開にまで着手されていないと言える。

次にⅢとⅣに関しては、貨幣の本質に関する認識であり、エコロジー貨幣論でもソディから最近の議論にかけてエコロジー空間において貨幣（したがって真の富と仮想的な富との区分）をどのように捉え、位置づけるか議論が進められてきたことから、エコロジー貨幣論の独自性が発揮されるべきコンセプトであると言える。ただし、エコロジー貨幣論は富の実物的側面と貨幣的側面との明確な区別と両者の対立的ギャップを問題視するところに独自性があるのに対して、負債のヒエラルキー構造には相対的な力点が置かれていないと言える。

続いてⅤに関しては、エコロジー貨幣論が、MMT を補完し、ポスト・ケインズ派の貨幣・信用理論の分析枠組みに対しても独自の示唆を提供できる部分であると考えられる。特に、現代の SFC に先行する貨幣的サーキット理論（Graziani（2003）や Parguez and Seccareccia（2000）などを参照）の分析枠組みは、循環という視点において、前節の図 2 に示した Ament によるエコロジー空間における貨幣の位置付けとの融合が可能であるように思われる。また、望月（2020）では、SFC の特徴として、部門間のフローとストックの会計の一貫性と、各部門や各主体どうしの金融取引関係が実物取引に影響を与えるかを現実的な形で抽出した需要主導型の方程式体系の 2 点を挙げて解説されている（望月，2019：86-103）。この点に関しても、前節の図 1 で示された富と仮想的富との関係性は、実物的取引と貨幣・金融的取引との関係に置き換えて考察を発展させることが可能であろう。したがって、SFC はエコロジー経済学自体の一般的枠組みの一つであるエントロピー法則や定常経済

の展望とも親和的であるように思われる¹⁹⁾。

以上をまとめると、現代の異端派経済学における MMT とエコロジー貨幣論との擦り合わせから、MMT のコンセプトⅢおよびⅤにおいて、両者で問題意識が共有されており、今後の議論展開において相互補完性がありうると判断される。

V まとめ

本稿は、現代の異端派経済学における貨幣・信用理論の今後の総合に向けて、「貨幣の信用理論」を一つの支柱として据え、これまでの展開の学史的な考察と、総合に向けた一つの突破口としてエコロジー経済学における貨幣・信用理論の独自性に着目して前者との擦り合わせを試みた。最後に本稿全体のまとめとして、いくつかのインプリケーションを列挙しておくことにする。

1. 本稿の問題意識の出発点であるシュンペーターの「貨幣の信用理論」の現代的再構築の観点からは、SFC モデルとも十分親和性が認められるソディ以来のエコロジー理論の親和性と有用性を確認した。このことは、グラツィアーニが貨幣的サーキット理論の先駆者としてシュンペーターを明確に位置づけたことを鑑みると、シュンペーターの未完の貨幣・信用理論に対しても、本稿の考察は示唆的である。
2. 最近のエコロジー貨幣理論は、その先駆者とされる 20 世紀前半のソディの議論から約半世紀の断絶を経て、2000 年代以降のいくつかの金融危機を踏まえた新たな貨幣・信用理論を展望して再開された議論として位置付けられる。したがって、本稿の当初の問題意識であったエコロジー貨幣論の側から異端派経済学に対する示唆を引き出すという点では空振りに終わった感がある。しかし、経済空間（実物経済と貨幣経済の相互作用から成り立つ）あるいはエコロジー空間（経済空間とその外部との相互関係も考慮に入れる）という共通のシステム論的観点から、両者はそれぞれ独自の枠組みを構築してきた経緯があり、分析枠組みのレベルでの相互対話の可能性が明らかになったと考えられる。

ただし、本稿では「貨幣の信用理論」を軸に据えた異端派経済理論の貨幣・信用理論の具体的展開、あるいは既存の理論的諸派の総合に関する具体的考察にまで至らなかった。また、最近のエコロジー貨幣論の構築に対して、異端派経済学の側からの示唆も提供するに至っていない。これらの個別課題については、次稿で取り上げる。

（金沢大学人間社会研究域経済学経営学系）

付 記

本研究は JSPS 科研費 21K01412 の助成を受けたものである。

注

- 1) これは credit theory of money の直訳であるが、経済学では一般に「信用貨幣論」と呼ばれている（島倉（2022）を参照。島倉自身は「債務貨幣論」という呼称を推している）。しかし、ここではシュンペーターが用いた monetary theory of credit と credit theory of money を対比的に位置づけるために敢えて直訳にしている。
- 2) シュンペーターの未完の書『貨幣と銀行の理論』（現時点でその完成版といえるフランス語版 Schumpeter（2005）のタイトル）の一次文献に関しては、上記以外に Schumpeter（1917-18/1956）、（1970/2014）および Berti e Messori（1996）を参照。
- 3) これはワルラスの一般均衡体系に時間を導入したものと見ることができる。また、マルクスの単純再生産表式に相当するものとも考えることができる。ただし、シュンペーターの循環的フローの独自性の一つは、そのような過程が、「均衡の近傍」の範囲内で一定のゆらぎを伴いながら進行する「定常過程」と考えた点にあるといえる。
- 4) 実際、このような視点は貨幣サーキット理論の代表的文献の一つである Graziani（2003）でも言及されている。
- 5) シュンペーターはこれらの概念を適用して、それまでの経済学における貨幣理論を次のように評価している。「ソートンからミルにいたるイギリスの指導者たちは、信用の構造を探索し、そうすることによって、貨幣分析に対する彼らの主要な貢献となった。しかし信用の貨幣理論の形では適切に述べることができなかったいくつかの発見をした。ところが彼らは、これらの発見の理論的な含意を全うすること、すなわち体系的な貨幣の信用理論を構築することができず、原理的には依然として信用の貨幣理論にしがみついていた。」（Schumpeter, 1954, 邦訳（中）：623-4）
- 6) 『『信用』の諸機能は、いかなる形態や種類のものであっても、いずれも貨幣制度の運営に影響を与えざるをえない。さらに重要なのは、この機能が資本主義の動力の運行に大いに影響を与える点である。それは資本主義の本質的部分とまでなるものであって、これなくしては残余の部分もまったく理解できないのである。この点こそ、経済学者が 17 世紀において発見し、18 世紀において推敲を加えよう試みたものであった。まさにこの時にこそ、資本主義が分析的に発見されたのである。別の言葉で言えば、資本主義が自己を発見したか、ないしは分析的に自己を意識するにいたったとも言えよう。」（Schumpeter, 1954, 邦訳（上）：576）
- 7) このような限界に加えて、シュンペーターはマネタリストの理論的背景である貨幣数量説やマネタリストの教義に不満を持っていたにもかかわらず、銀行を起点とした新たな貨幣商品の創造とそれに続く流通を伴う場合（支出を刺激する場合）にのみ信用を拡張しようとした点でマネタリズムと整合的と見做されたという意味で、伝統的な貨幣理論を完全に乗り越えることができなかったとして、シュンペーターを「挫折した信用論者」とする見解もある（Earley（1994）を参照）。
- 8) シュンペーターは、マクラウドの貢献に関して、次のように言及している。「私はこの誤解された人 [マクラウド] に喜んで正当の地位を与えるが、急いで強調したいのは、私がまったく独立に、まったく異なる道を経て、まったく異なる目的のために、彼と同じく資本は一定の意味において購買力であるという結論に到達したことである。…彼が購買力創造の事実こそわれわれの経済生活の組織の本質的要素であると認識したことは、…今日一般にますます多くの注目を惹きつつある。」（Schumpeter 1934/1961, 邦訳上

330頁)

- 9) マクラウドの貨幣・信用理論に関する包括的な先行研究として、二階堂（1993）や古川（2020）を参照。
- 10) 以下では、基本的に Innes（1914）に依拠しながら考察し、必要に応じて Innes（1913）にも言及する。
- 11) イネスと同じく貨幣・信用に関する一般的認識からの転換を強調する Geoffrey Ingham の諸論考も参照のこと。というのも、イネスの論文に対してはケインズによる好意的な論評（Keynes, 1914）があるが、Ingham（2004a）,（2004b）,（2008）は両者を架橋する論考であると言える。
- 12) この理由は様々考えられるが、その一つとして、ソディが大きく依拠した経済思想が、経済学では極めて異色の存在であるジョン・ラスキン（1819-1900年）だったことがあるように思われる（ソディの評伝に関しては Merricks（1996）を参照のこと）。ソディは従来の経済学に対して概ね否定的だったが、彼が唯一賛同したラスキンの貨幣観（ソディは貨幣観に関してシルビオ・ゲゼルなどにも依拠している）は、ソディと同様に富と負債を概念的に区別する。前者に関しては、単なる物性的な関係ではなく、生身の人間の精神や人間どうしの関係性の観点から捉えようとしたのに対し、後者に関しては、本来は雇用創出や消費活性化のために役立てられるべきものであって、事業主の事業拡大のための投資ではないと捉えていた。その上で、貨幣は財の購入のための交換媒体であるだけでなく、移転が可能な負債でもあるとみなしていた。
- 13) 日本の経済学研究においてソディの貨幣論研究やそれに依拠した先行研究として、桂木（1986）、泉（2004）、寺岡（2018）などが挙げられる。また、藤堂史明や河宮信郎らによる特に Soddy（1926）の邦訳を中心とした一連の論考などがある。
- 14) このことに関するさらに立ち入った示唆に富む考察については、Soddy（2012）、邦訳（上）：47-53を参照。このようなソディの考察を踏まえた負債に関する経済学的考察に関しては、例えば桂木（1986）を参照のこと。ただし、言うまでもないことだが、ソディの富や負債の概念の再構築は、熱力学の法則の観点から導出されたものであって、それによって経済学における富や負債に関する従来の議論が、すべて覆されるわけではない。ソディの独自の概念形成に対する経済学の立場からの批判的考察に関しては、例えば泉（2004）を参照のこと。
- 15) Ament（2020）では、経済が複雑な社会システムや有限な生態系に組み込まれたサブシステムであり、両者は継続的に共進化していくことを、エコロジー経済学の核心的視点としている。同様な社会と生態系の捉え方は、Kallis and Norgaard（2010）などでも共有されている。先に取り上げた眞弓の考察でも、経済社会の側面と生態系が相互依存関係にあるという視点は共有されているといえるだろう。
- 16) グレーバーの負債論を経済学における貨幣論との関連において考察している山本（2021）も参照のこと。
- 17) これに関連して Ament は「貨幣の信用理論」にも言及しており、これを構築するための課題を3つ挙げて検討している（Ament, 2020: 4-5）。第一は、交換問題に対する論理的解決策としての計算単位という論点である。これは物質的媒体の交換が行われる前に計算貨幣が存在しなければならず（Ingham, 2004b: 181）、それは経済学におけるヌメレール（商品そのものであると同時に商品の特別な表現者でもある）を前提に代替するものである。第二は、物々交換問題に対する歴史的に正確な解決策としての負債と信用という論点である。物々交換ではなく負債が、交換媒体ではなく計算単位が貨幣の基礎を形成するという認識の下で、すべての貨幣は信用であるが、すべての信用が貨幣であるわけではなく、信用は発行者が負うあらゆる債務を相殺できる場合のみ貨幣として存在するとされる。第三は、信用・負債の中心としての権力という論点である。貨幣は、負債の時間・空間的性質と信用に内在する権力を具現化する社会的関係によって形成されるという認識を反映したのもであると同時に、貨幣単位を決定し、貨幣が必要とする法を執行する権力をもつ国家理論の必要性を説くものである。
- 18) MMT に関する文献はここ数年で急増したが、本稿では特に Wray（2015）、島倉（2019）、（2022）、望月（2019）、（2020）に依拠した。
- 19) ハーマン・E・デイリーらをはじめとする定常経済に関する議論（例えば Daly（1980）を参照）に関しては、ポスト・ケインズ派から SFC モデルを用いて、純利潤がプラスであることはゼロ成長定常状態と矛盾しな

いことが論証され、定常経済（その結果としての脱成長経済）は貨幣が有利子負債として生み出されるシステムとは相容れないという考え方に対する批判が提出されている（Cahen-Fourot and Lavoie, 2016）。

文 献

- 泉留維, 2004, 「F・ソディの貨幣・経済論」(I・II)『自由経済研究』ばる出版, 29/30: 1-38/1-33.
- 桂木健次, 1986, 「負債としての資本論」『富山大学教養部紀要（人文・社会科学篇）』19(1): 61-73.
- 島倉原, 2019, 『MMT とは何か』角川新書.
- , 2022, 『MMT 講義ノート』白水社.
- 寺岡寛, 2018, 『ソディの貨幣制度改革論』信山社出版.
- 二階堂達彦, 1993, 「H.D. マクラウドの信用理論と近代的信用観の形成」『大妻女子大学論集』27: 159-171.
- 古川顕, 2020, 『貨幣論の改革者たち』ナカニシヤ出版.
- 望月慎, 2019, 「Modern Monetary Theory の概説」『立命館経済学』68(2): 62-77.
- , 2020, 『最新 MMT [現代貨幣理論] がよくわかる本』秀和システム.
- 山本泰三, 2021, 「負債, 主権, そして貨幣」『大阪産業大学経済論集』23(2): 65-84.
- Ament, Joe, 2020, "An ecological monetary theory," *Ecological Economics*: 171, 1-10.
- Cahen-Fourot, Louison and Marc Lavoie, 2016, "Ecological monetary economics: a post-Keynesian critique," *Ecological Economics*, 126: 163-168.
- Berti, Lapo e Marcello Messori eds., 1996, *Trattato della moneta capitol inediti*, Edizioni Scientifiche Italiane.
- Daly, Herman E., 1980, "The economic thought of Frederick Soddy," *History of Political Economy*, 12(4): 469-488. (新田功・藏本忍・大森正之共訳, 2005, 『持続可能な発展の経済学』みすず書房, 第12章.)
- Earley, James, S., 1994, "Joseph Schumpeter: a frustrated 'creditor'," Gary Dymmski and Richard Pollin eds., *New Perspectives in Monetary Macroeconomics*, The University of Michigan Press: 337-351.
- Graeber, David, 2011, *Debt: The First 5,000 Years*, Melville House. (酒井隆史監訳, 『負債論：貨幣と暴力の5000年』以文社.)
- Graziani, August, 2003, *The Monetary Theory of Production*, Cambridge University Press.
- Ingham, Geoffrey, 2004a, *The Nature of Money*, Polity Press.
- , 2004b, "The emergence of capitalist credit economy," L. Randall Wray ed., *Credit and State Theories of Money: The Contributions of A. Michell Innes*, Edward Elgar: 173-222.
- , 2008, *Capitalism*, Polity Press.
- Innes, Alfred Michell, 1913, "What is money?," *The Banking Law Journal*, 30: 377-408. (楊枝嗣郎訳, 2020, 「A. M. イネス著『貨幣とは何か?』(上・下)『佐賀大学経済論集』52(4/5): 137-166/95-121.)
- , 1914, "Credit theory of money," *The Banking Law Journal*. 31: 151-168. (楊枝嗣郎訳, 2020, 「A. ミッチェル・イネス『貨幣の信用理論』『佐賀大学経済論集』53(3): 75-110.)
- Kallis, Giorgos and Richard B. Norgaard, 2010 "Coevolutionary ecological economics," *Ecological Economics*, 69: 690-699.
- Keynes, John Maynard, 1914, "What is Money? By A. Mitchell Innes," *The Economic Journal*, 24(95): 419-421.
- Larue, Louis, 2020 "The ecology of money: a critical assessment," *Ecological Economics*, 178: 1-9.
- Mayumi, Torasan Kozo, 2020, "Beyond the conventional view: reconsidering money, credit, and interest," Mayumi Torasan Kozo, *Sustainable Energy and Economics in an Aging Population*, Springer: 79-97.
- Merricks, Linda, 1996, *The World Made New: Frederick Soddy, Science, Politics, and Environment*, Oxford

University Press.

Parguez, Alain and Mario Seccareccia, 2000, "The credit theory of money: the monetary circuit approach," John Smithin ed., 2000, *What is Money?*, Routledge: 101-123.

Renner, Ansel, Daly, Herman and Kozo Mayumi, 2021, "The dual nature of money: why monetary systems matter for equitable bioeconomy," *Environmental Economics and Policy Studies*, 23: 749-760.

Schumpeter, Joseph Alois, 1917-18, "Money and Social Product," translated by Arthur W. Marget, 1956, *International Economic Papers*, 6: 148-211. (三輪悌三訳, 1961, 『貨幣・分配の理論』東洋経済新報社, 第1部.)

———, 1961, *The Theory of Economic Development*, translated by R. Opie, Oxford University Press. (塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳, 1977, 『経済発展の理論』(上・下) 岩波書店.)

———, 1954, *History of Economic Analysis*, edited from Manuscript by Elizabeth B. Schumpeter, Oxford University Press. (東畑精一・福岡正夫訳, 2005-06, 『経済分析の歴史』(上・中・下) 岩波書店.)

———, 2005, *Théorie de la Monnaie et de la Banque (I • II)*, L'Harmattan.

———, 2014, *Treatise on Money*, edited by Fritz Karl Mann, translated by Ruben Alvarado, Wordbridge Publishing.

Soddy, Frederick, 1933, *Wealth, Virtual Wealth and Debt: The Solution of the Economic Paradox*, 2nd edition, E.P. Dutton & Co..

———, 1934, *The Role of Money*, George Routledge and Sons, Ltd.

———, 2012, *Cartesian Economics: The Bearing of Physical Science upon State Stewardship*, Cosimo Classics. (宮坂さかえ訳, 2004, 「デカルト派経済学: 国家財産の管理に対する物理科学の関係」(上・下) 『自由経済研究』 ぱる出版, 29/30: 39-58/34-48.)

Wray, L. Randall, 2015, *Modern Monetary Theory: A Primer on Macroeconomics for Sovereign Monetary Systems*, 2nd edition, Springer Nature Limited. (島倉原監訳, 2019, 『MMT 現代貨幣理論入門』東洋経済新報社.)